

鷺山遺跡群における発掘調査成果の報道機関発表資料

平成16年1月9日 午前11時30分から
於 市政記者室

1. 鷺山遺跡群における発掘調査の成果について

別紙参照

2. 発掘調査現場の一般公開について（現地公開）

日時：平成16年1月17日（土）午前10時から正午まで

小雨決行、中止の場合は18日（日）に順延

全体説明は午前10時からの1回で30分程度

会場：下土居北門遺跡A1区（別紙地図参照）

<問い合わせ先>

岐阜市教育委員会 社会教育室 文化財グループ

（財）岐阜市教育文化振興事業団 埋蔵文化財調査事務所

1. 鷺山遺跡群における発掘調査の成果について

調査面積：約3,500m²

調査期間：平成15年5月28日～平成16年3月15日まで

調査主体：(財)岐阜市教育文化振興事業団 埋蔵文化財調査事務所

出土遺物 土師器 1、須恵器 2、瀬戸・美濃産陶器 3、木製品、銅製品など約40,000点

戦国時代の「蝉土手城館跡」の堀を確認（鷺山蝉遺跡B3区）

戦国時代の福光城下町を形成したと考えられる遺構を多数確認（全調査区）

戦国時代の土坑から炭化材・土師皿が大量に出土（鷺山仙道遺跡F1区）

古墳時代中期の祭祀と考えられる痕跡を確認（正明寺城之前遺跡D3区）

戦国時代（16世紀初頭、約500年前）

鷺山での発掘調査は今年度で5年目を迎える。毎年多くの戦国時代の遺構 4が見つかり、それらは1509年頃に福光に造られたされる館の周辺に形成された城下町を構成するものと考えられている。今年度も各調査区で多くの遺構を確認している。

鷺山蝉遺跡B3区の東端で南北方向の溝を確認した。規模は幅7.2m、深さ2.1mを測る大きなものである。埋土中からは土師皿、漆器椀など多くの遺物が出土している。本調査区の東側の土地は「蝉土手城館跡」があったとされる場所で、その規模は1辺約120mを測り、四方は土塁で囲まれていたとされ、その痕跡は明治時代に作成された地籍図や地図においても明確に見ることができる。今回の調査で確認した堀は土塁の外側にあった堀と考えられる。また土塁と考えられる盛土も確認していることから、文献に書かれた「蝉土手城館跡」が実際に存在したことを裏付ける貴重な発見となった。

鷺山仙道遺跡で確認した土坑 5からは大量の炭化材と土師皿が出土した。炭化材の材質は竹で、方向が一致していることから、土壁もしくは土堀の骨組みなどの可能性が考えられるがはっきりと断定はできない。炭化材の下部からは百数十枚の土師皿が出土している。

その他、正明寺城之前遺跡D3区ではこれまでに見つかった区画溝 6とは軸線を異にする区画溝を確認した。確認した長さ約22m、幅2m、深さ0.8mを測り、埋土中から大量の土師器皿 7が密集して出土し、それらは大きさを分別して捨てられていた。下土居北門遺跡A1区でも区画溝を確認している。ただしこの溝は途中で途切れる部分があり、道もしくは橋があったと考えられるが、いずれにしても鷺山地区では初の発見である。また同地区で石組みの井戸を2基確認している。石組みの下には桶が据えられていた。1つは井戸の内径約0.7m、深さ約2.5mを測り、今までに見つかった井戸と同じ規模である。もう1つの井戸は内径約1.3m、深さ約3.2mを測る大きなものである。桶材の厚さは4cmで、かなり丈夫なものを使っている。

古墳時代（前～中期、約1,500年前）

正明寺城之前遺跡D3区では、中央部から東部にかけて川と考えられる地形を確認した。調査の安全上底部まで確認できなかったが、深さ約1mで古墳時代中期の遺物を含む層を確認し、上部の堆積と出土遺物からこの川は古代までには埋まったと考えられる。川の北岸付近で、S字状口縁台付甕 8のミニチュア製品、小型壺など日常生活には不必要と考えられるような土器が多く出土した。中には、S字状口縁台付甕の脚台部分だけを使用し、逆さにして地面の上に置いてある状況が確認できた。脚台は2～3個重ねられ、それが3～4単位密集して出土した。

鷺山地区で発掘調査を行うと、どこの調査区でも古墳時代から古代の竪穴住居 9を確認することができる。しかし正明寺城之前遺跡については、東部で多くの竪穴住居を確認しているものの、西部と南部では過去4年間で1棟しか確認しておらず、また今回の調査でも1棟も確認できなかった。竪穴住居以外の痕跡はあるため、人が住んでいたのは間違いないが、今回の調査区の周辺は他の調査区とは違い集落とは別の性格を持った地域であると考えられ、おそらく祭祀を行っていた場所である可能性が高い。

【用語説明】

1. 土師器 : 弥生土器の技術を受け継いだ、古墳時代以降の素焼きの土器。成形し、野焼きで焼かれるため、赤褐色の軟質な製品となる。土鍋や釜といったものは近世まで使用、生産され続ける。
2. 須恵器 : 古墳時代中期、朝鮮半島から技術者によりもたらされた土器。ろくろで整形し、窯の中で1000 以上の高温と還元状態で焼かれるため、青灰色の硬質な製品となる。後の陶磁器生産の起源となるものである。
3. 瀬戸・美濃産陶器 : 愛知県瀬戸市および岐阜県東濃地方で焼かれた陶器。
4. 遺構 : 地中に残る人間活動の痕跡の総称。住居、墓、道路など。
5. 土坑 : 穴状遺構。用途にはゴミ捨て、墓、貯蔵などがある。
6. 区画溝 : 屋敷地の境界に用いられた溝。
7. 土師器皿 : 素焼きの皿でかわらけともいう。
8. S字状口縁台付甕 : 古墳時代前～中期に東海地方で製作・使用された脚台の付いた甕型の土師器。器壁が大変薄く、口縁部がS字状に屈曲することが特徴で、煮炊きに使用された。
9. 竪穴住居 : 地面を掘り下げて床面を形成した半地下式の住居。平面形には方形、円形などがある。平安時代まで使用される。